

祖先と死者についての

カトリック信者の手引

カトリック中央協議会

祖先と死者についてのカトリック信者の手引

目次

はじめに	3
第一部 「死者との交わり」の根本精神	5
一、教会における「死者との交わり」	5
二、日本における「祖先との交わり」	8
第二部 「祖先との交わり」をめぐる問題解決の実践的手引	13
家庭	15

葬儀・命日・法事	19
お墓参り・お墓	22
その他	26
あとがき	30

はじめに

日本の社会では、宗教といえれば必ず死者をまつる行事が伴います。このような状況の中で、カトリック信者は自分の信仰を守るだけでなく、周囲の人たちにキリストの福音をのべ伝えたいです。そのために、ともするとカトリック信者が他の宗教の死者に関する行事に参加することは、信仰に反するのではないかとという疑問をもつことがあります。他方では、このような行事に参加しなければ、社会生活を円滑に営んでゆくことができないと悩むことがあります。日本カトリック司教協議会・諸宗教委員会は、多くのカトリック信者がこのような板ばさみの中に生きていくことを知り、これらの問題を信者が自主的に解決するための助けとなる手引きを提供したいと思えます。

この手引きは、具体的問題に「どのように対処したらよいか」についての指針です。ですから、カトリックの教義を説明するよりは、むしろ具体的問題に対処し、それを解決するた

めの一般的指針です。したがって、この手引きは個々の状況によって信者が適宜判断し、具体的に適応してゆくためのものです。

そこで、第一部では、まず、カトリック教会が亡くなった信徒に対して、どのように考え、どのように実践してきたかを述べます。次に、キリストを知らずにこの世を去った死者に対して、どのような態度をとったらよいかを述べます。第二部では、「祖先との交わり」をめぐる具体的な問題を問答式に取りあげます。

第一部 「死者との交わり」の根本精神

一、教会における「死者との交わり」(1)

父なる神は、はかりしれない慈愛と知恵と自由をもつて、キリストを通じて全人類を救済しようとしておられます(2)。御父の救済意志を身に受けて、キリストは「肉となられ、わたしたちのうちに住まわれた」(ヨハネ1・14)のです。そして、キリストは死と復活を通して天に上げられ、すべての人をご自分のものと引き寄せられました(ヨハネ12・32)。聖霊を弟子たちに注ぎ、神のいのちにあずからせ、「ご自分のからだ」である教会を形づくられました。教会は、キリストの生きた神秘体として、すべての人をキリストの救いへと導き、世の

終わりにその復活と栄光にあずかるよう招いています。

「キリストの神秘体に属する人たちのうち、ある人たちはすでに神の栄光を受け、三位一体の神を直観し、至福のうちにいますが、ある人たちは地上の生活を終えて清めを受けており、また、ある人たちはこの地上にあつて終末の栄光に向かつて旅路を続けています。死者と生者とは異なつた状態におかれています。同じ「キリストのからだ」に属しています。ですから、神の愛と隣人愛によつて、靈的交わりのうちに固く結ばれているのです。

地上を旅する教会は、「キリストのからだ」における交わりを深く心に刻み、世の終わりの復活を信じています。教会は、キリスト教初期の時代から深い敬愛の念をもつて死者の記念を行つてきました。死者のために罪とその罰からの清めを願ひ、祈りと犠牲を捧げてきました。他方、すでに神の栄光にあずかつている諸聖人に対しては特別な愛と尊敬を抱き、聖人の取り次ぎを祈り、また、これらの人たちの聖なる模範にならうよう努めてきました。

このような死者の記念や尊敬は、死者を神としてあがめるものではありません。祖先を神としてあがめるならば、それは明らかにキリスト教の信仰に反します(3)。キリスト教にお

ける死者の記念と尊敬は、死者のために神に祈ることが中心になっています。祈りは、自分の身内、親類、その他関係のあった人たちのために捧げるのは当然ですが、この世でわたしたちと縁のなかつたすべての死者のために祈ることも大切です。また、わたしたちは、世の終わりの復活を信じていますから、死者のために祈るときも、亡くなった近親者を思い出すときも、希望に満ちていなければなりません。

教会は、このような精神のもとに、それぞれの国の習慣を取り入れ、死者の記念を行ってきました。多くの地域で死んだ家族のために墓を作り、墓参して草花、植樹を飾る風習を守り、また、ある地域では、先祖の写真を家族の集まる居間に飾り、先祖への愛と尊敬を子孫の心にはぐくみ育ててきました。したがって、日本でも同じ精神に基づいて日本の伝統を適切に取り入れて「死者の記念」を实践したいものです。

二、日本における「祖先との交わり」

これまで述べてきたことは、キリスト教的信仰に生きる者同志の交わりについてですが、これは、ある適切な配慮のもとで、キリストを知らずに死んだ人たちにも適用することができます。なぜなら、第二バチカン公会議は、次のように表明しているからです。

「このこと（キリストの復活秘義にあずかること）は、キリスト信者についてばかりでなく、心の中に恩恵が目に見えない方法で働きかけているすべての善意の人たちについても言うことができる。実際、キリストはすべての人のために死なれたのであり、人間の究極的召命は、実際にはただ一つ、神的なものであるから、聖霊は神のみが知りたもう方法によつて、すべての人に復活秘義にあずかる可能性を提供されることを、わたしたちは信じなければならぬ」(4)

もともと人間は、誰がキリストの恵みにあずかっているかを知ることができません。した

が、わたしたちは御父の全人類救済の悲願に信頼し、また、キリストの救いのみ業の大無辺な力を信じつつ、ふさわしい方法で祖先に対する愛と尊敬を表さなければなりません。その上、第二バチカン公会議は、キリスト教以外の諸宗教とその習慣について、次のように表明しています。

「すでに古代から現代に至るまで、種々の民族が自然界の移り変わりと人生のさまざまな出来事にひそむ、あの言い尽くしがたい力を認めている。それどころか、時として、神的な最高のものを感じ、さらには父なる神をも感じとっている。こうした認識や霊的感覚は深い宗教感情となって、かれらの生活のすみずみにまで及んでいる」(5)

第二バチカン公会議のこの精神に従って、わたしたちは日本人が古来から実践してきた「祖先をまつること」に深い宗教的感情や霊的感覚を発見し、それを評価しなければなりません。「祖先崇拜」は、根本的には、日本人が先祖に対して抱いている愛と尊敬と家族の情緒的連帯感から発したものです。それは同時に、歴史の時の移り変わりの中で、つねに宗教と結びつき、それぞれの宗教的色彩を帯びていきました。この宗教的側面についていえば、キリ

スト教的信仰と相いれないものがあつたかもしれません。しかし、日本人の死者に対する儀礼の多くは、祖先に対する愛と尊敬から生まれたものですから、この点では、カトリック教会が昔から行つてきた「死者の記念」と共通するものをもっています。

第二バチカン公会議は、次のようにも言っています。

「教会は、これらの宗教の中にある真実なものと、聖なるものとを退けない。諸宗教の行動と生き方、掟と教えを偏見なしに熟考するなら、それらは教会が守り従い、教えていること時には相違しているところがあるとしても、すべての人を照らすあの「真理」の光を伝えていることはまれではないことを知るのである。言うまでもなく、教会は絶えずキリストを告げるだけでなく、告げる義務をもっている。キリストは道であり、いのちであり、真理である（ヨハネ14・6）。人はキリストのうちに宗教生活の完全な姿を見いだすだけでなく、神はキリストにおいて、すべてをご自分と和解させたのである。

だから、教会は自分の子らを次のように励ます。賢明に、愛をこめて、他の宗教の信者との対話と協力を通して、キリスト教の信仰と生き方の証しとなりながら、こうした人たちの

もとに見いだされる霊的遺産と倫理的善や社会的、文化的な諸価値を認め、守り、大切にしなければならぬ」(6)

注

- (1) 「死者との交わり」というのは、キリスト教的な意味での交わりを意味しており、霊媒による「死者との交わり」などを意味していません。
- (2) 一テモテ2・4-6参照。また、テトス2・11では「神の恵みは、すべての人に救いをもたらす」と述べられ、神がすべての人の救いを望んでおられることを示しています。神学用語で「神の普遍的救済意志」と呼んでいます。
- (3) ただし、「祖先崇拜」という言葉から、ただちに、祖先を神として崇拜することであると結論づけてはなりません。崇拜という言葉は、「あがめ拝する。また、尊敬する」(広漢和辞典・上巻、一〇九二ページ、大修館書店)という意味をもち、神に対しても、聖者に対しても、祖先に対しても使われているからです。多くの場合、尊敬の意味に使われていますが、状況によって違いますが、祖先を神として礼拝している場合があるかもしれませんので注意すべきです。
- (4) 『現代世界憲章』22
- (5) 『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』2
- (6) 『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』2

付記

これは、あくまでもカトリック信者への指針です。これを「靖国神社問題」と結びつけることは、上述してきたことでもわかるように、この指針の趣旨に反するものです。

第二部 「祖先との交わり」をめぐる

問題解決の実践的索引

第一部でもすでに述べたとおり、日本の多くのカトリック信者は、日本の諸宗教を信ずる家族、また、そのような社会環境の中で生活しています。それゆえ、日々の生活の中で、諸宗教との関わりや死者についてどのように考え、対処したらよいのか思い悩んでいる多くの信者がいるのも現実です。このような人たちの心配と不安を少しでも軽くするために、この実践的索引の小冊子の作成を試みました。これは、キリストの復活信仰に根ざした死者との関わりについて、より明瞭な問題解決を述べ、実践の手引きとなすものです。

過去において、ある人が洗礼を受けた時、仏壇や神棚を取り除くようにいわれたこともあ

りました。そのような時代を過ごした信者の方からは、この小冊子は、かなり緩やかなものであり、あるいは、他宗教への迎合とも受けとれるかもしれません。

しかし、みなさんも、すでにご存知のように、一九六二年から一九六五年の間に開催された第二バチカン公会議は、「開かれた教会」として世に自らを問い直しました。その一つとして諸宗教に対しては、以前は護教的立場が強く、前述のごときことも行いましたが、今、教会は、諸宗教の中にも働かれる神を見いだし、その中に福音的価値を見いだそうとしています（『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』参照）。

これは、教会の根本的態様が変わったわけではなく、見えなくなっていたものが見えるようになってきたと言えるでしょう。このような態度は、昔も今も教会の中に変わらずにあつたわけですが、教会の長い歴史の中では、ある点は見えにくくなった場合があります。この諸宗教に対する態度も、それに光が当てられ、わたしたちの目に明らかになつたわけです。

以下、具体的に問答式でいろいろな方から寄せられた質問に答えていきます。

家庭

〈問1〉 仏壇をどうすればよいのでしょうか。

〈答〉 家族全体がカトリック信者になった場合、できれば家庭祭壇だけにしたらよいでしょう。親類などのつき合いで仏壇を取り除くことができない場合には、仏壇を安置してかまいません。

家庭祭壇は、その家庭の「祈りの場」です。仏壇を家庭祭壇として使う場合には、仏像、掛軸などを他に移してキリストの像、十字架、マリア像などを置きます。また、位牌を置く場合には、それらと共に置くこともできます。

〈問2〉 仏教では、死者の供養のために唱えるお経がありますが、カトリックには、そのようなものがありますか。

〈答〉 カトリックには、死者の供養のために唱えるお経はありませんが、死者のための祈りがたくさんあります。死者のためにミサをささげることが適切な方法です。ミサは、イエス・キリストの死と復活の記念ですから、無限の功德があります。古くから教会では、死者

のためにミサを捧げることが行われてきました。

死者との交わりを深めるのは家族の務めです。家族が時々集まって、死者のために祈ることをお勧めします。いろいろなカトリックの祈り書の中には「死者のための祈り」がありますから、それを使うとよいでしょう。また、時には司祭を呼んで祭壇の前で死者のための祈りを唱えることは、大変良いことです。

〈問3〉 果物・お茶・お酒など故人が好んでいた物を供えてもよいのでしょうか。

〈答〉 カトリックの教えでは、祈り・償い・愛のわざが死者のためになります。故人に対する尊敬と愛情の表現として、これらを供えてもよいでしょう。故人との交わりを深めるために毎日供えることも差し支えありませんが、ただ形式的にならないようにしましょう。

〈問4〉 仏教の過去帳（家庭の中に保存しているもの）のようなものが、カトリックにもありますか。

〈答〉 仏教の過去帳と同じものはありません。しかし、死者との交わりを深めるために、カトリックでも霊名（洗礼名）や、誕生・洗礼・堅信・結婚・死亡年月日などの記録が家庭

にあつてもよいでしょう。その他、亡くなった人の記念として記録をつくり、祭壇あるいは他の適当な場所に保存することもできます。信者の場合、必ず霊名を書き入れましょう。

〈問5〉カトリックは、位牌をどうしますか。

〈答〉追憶を深めるために写真を飾ることは、今日でも行われています。写真の他に信者の位牌をつくることもよいでしょう。その場合には、十字架を刻み、霊名を書き入れましょう。また、信者でない方の位牌は、カトリックの家庭祭壇に置いて差し支えありません。

〈問6〉カトリックにも戒名がありますか。

〈答〉戒名は、教団に加入した時与えられる名、すなわち、仏法に帰依した者の名を表していました。死後与えられるようになったものです。

カトリック信者は、洗礼を受ける時霊名を授かり、その時すでに神の生命にあずかっていますので、あらためて別の名をいただく必要はなく、霊名で十分なのです。

信者は、お墓などに必ず十字架と霊名を書き入れましょう。

〈問7〉わたしはカトリック信者ですが、婚家の他の家族はみな仏教徒です。わたしは仏壇

の前に手を合わせ、鈴を鳴らし、御飯を供え、祈りなどをしてもよいのでしょうか。

へ答へ たとえ先祖の方が洗礼を受けていなくても、善意のうちに世を去ったすべての先祖のために祈り、その保護を求めることは、その家族の一員として尊い務めです。

仏壇の前に手をあわせる時、たとえば「主よ、かれ（かれら）に永遠の安息（やすらぎ）を与えたまえ」と心の中で祈ります。そして、鈴を鳴らし、御飯を供えるのは、先祖に対する愛情と尊敬の表現として行われるのですから、その気持で、これらのことを行うようにしましょう。

へ問へ 主人はカトリック信者ではなく、長男でもありません。先祖をお守りするような位牌はありません。しかし、主人が亡くなった場合（家族の信者は、わたしと子供たち）、主人をどのようにまつればよいのかと困っています。

へ答へ 神のあわれみに信頼して、ご主人もキリストのからだに属することを希望し、可能ならばご主人のために教会で葬儀をするのが望ましいでしょう。お墓は、信者の家族と一緒にでも差し支えありません。

生前から、ご主人がキリスト信者になるように祈り、かつ、努力するようお勧めします。

葬儀・命日・法事

〔問9〕 わたしはカトリック信者ですが、先祖も両親も他宗教（仏教）でした。どのようにまつればよいでしょうか。

〔答〕 第二バチカン公会議（『教会憲章』16）によれば、本人の落度からではなく、おかれた状況のために、真の神も、救い主イエス・キリストも知らない人は、神の恩恵の働きのうちに、良心の声に従って忠実に行動するならば、イエス・キリストの十字架の死と復活の功徳によって、確かに、神の豊かな慈愛にあずかることができます。

したがって、このような死者（どの宗教の信徒であれ）は、神と深い愛のうちに交わり、近親者とも交わることができるのです。

ですから、カトリック信者は、教会の祈りと儀式によって自分の先祖と交わることができます。そればかりでなく、それは先祖の意に反するものではないでしょう。

先祖も両親も仏教徒であった場合、事情によっては、仏教の様式で冥福を祈ってもよく、また、親類などのお付き合い上、法事などを仏式でした方が良い場合もあります。

しかし、家族や親類が大部分カトリック信者である場合には、法事に相当する日に、家に司祭を招いたり、教会でミサを捧げ、祈りをするようにお勧めします。

〈問10〉 カトリック信者は、他宗教の儀式・命日・法事などに参加してもよいのでしょうか。

〈答〉 カトリック教会で葬式などのあった場合、他宗教の方も熱心にそれに参加します。

同じくカトリック信者も他宗教の儀式にあずかって、単に礼儀作法としてだけでなく、故人の冥福を祈ることは、キリスト教的な愛のわざになります。

焼香・献花などは、特定の宗教の儀式というよりは、どの宗教にも共通の儀式ですから差し支えありません。その時、カトリック信者は、たとえば、「主よ、かれ(かれら)に永遠の安息(やすらぎ)を与えたまえ」と心の中で祈りましょう。

〈問11〉 わたしは家を相続する者ですが、先祖も両親も仏教徒です。ですから、信者でない両親や兄弟の葬式は、兄弟、親類の関係上、どうしてもお寺でお坊さんにしてもらわなけれ

ばなりません。それでよいのでしょうか。

〈答〉 それでよいでしょう。自分がカトリック信者だからといって他人の宗教を無視することは、むしろ愛徳に反することであって、いつも注意しなければならぬ問題のひとつです。

〈問12〉 わたしの家には仏教徒もおりますので、月の命日や春秋の彼岸、お盆には檀那寺のお坊さんがこられます。これはお断わりすべきでしょうか。

〈答〉 お断わりする必要はありません。カトリックに改宗した当時は、先祖のまつりが仏教とカトリックの二本立てになることは、信教の自由を考えれば、当然のことでしょう。お坊さんが読経されている間、あなたも死者のために神に祈るべきです。

〈問13〉 家庭の中で一人だけ信者の場合、その本人が死んだ時、教会と連絡をとったり、葬儀ミサのことなどは、どうしたらよいでしょうか。

〈答〉 あらかじめ家族の方々や、カトリック信者の友人、代父母、また、教会の司祭や関係者に依頼しておいたらどうか。家族の方には、これらの教会関係者に連絡し、相

談するように伝えておきます。

また、教会関係者は、残された遺族の方々と相談の上、教会で葬儀ミサを行うようにします。遺族の方が仏式その他の方法で葬儀をしたいといえばやむを得ませんが、教会関係者は、その人のために追悼ミサを教会で行うべきです。

〈問14〉 日本では葬儀に際しては香典を差し出し、しかるべき時に香典返しをする習慣がありますが、信者は、どのようにすればよいでしょうか。

〈答〉 香典は、仏式の葬儀の場合、経済的・精神的負担を軽減するための相互扶助として行われたものです。香典返しは故人の生前の好誼こうぎに対する愛と感謝のしるしとして行われています。故人への愛と感謝の表明として行ってもよいでしょう。

しかし、キリスト教的清貧・素朴さを忘れないようにしたいものです。最近では、香典返しの代わりに福祉事業などへ寄付する傾向もあります。

お墓参り・お墓

〈問15〉 お盆には、カトリック信者は、どのようにすればよいでしょうか。

〈答〉 カトリック教会全体の「死者の日」は十一月二日ですが、日本の習慣に従って日本の教会の多くは、新旧のお盆の間に、死者のために祈り、また、死者のためにミサを捧げます。

八月十五日は「聖母マリアの被昇天」を祝いますが、聖母マリアの被昇天と共に、他の人たちの帰天を記念するのもふさわしいことです。カトリックでは、神の愛の中に祈りを通して、いつまでも亡き人たちと通じています。お盆や命日に亡くなった人との精神的一致を強め、特に祈りを捧げることは、大変意味深いことです。

〈問16〉 家のお墓は、代々、お寺の中にあります。お墓参りの場合、どうすればよいでしょうか。

〈答〉 家族のカトリック信者でない人、また、仏教徒の人たちと一緒にお墓参りする場合は、お坊さんに読経を依頼されてもよいでしょう。信者は、心の中で死者のために神に祈りましょう。

しかし、すでに一家全員が信者になった場合、お墓を移すことができないならば、お墓の

前で、みながカトリックの祈りを唱えればよいと思います。この場合、お寺がお墓の世話をしてくださるのならば、お寺と相談して、しかるべき御礼をしなければなりません。

なお、カトリックの家庭が新しくお墓をつくる時は、カトリック墓地があれば、そこにはない場合には、できるだけ公共の墓地などにお墓をつくった方がよいと思います。また、教会の納骨堂に遺骨を納めるのもよいでしょう。

〈問17〉 先祖のお墓を一つにしたいのですが、石屋さんは「墓石には魂が入っているので、魂を抜いてもらわないと触れない」といいます。どうしたらよいでしょうか。

〈答〉 お坊さんに相談し、また、親類、兄弟の考えを尊重して、石屋さんも含めみなさんの納得のいく方法をとることをお勧めします。

〈問18〉 わたしは、家を相続する者です。家族全員もカトリックになってしまったので、今までの仏教のお墓をみる者がなくなりました。何か良い方法はないでしょうか。

〈答〉 (1)可能なら新しいお墓をつくって改葬し、カトリックの方法ですることです。

(2)改葬できない場合は、お寺が許してくださるならば、しかるべき御礼をして、今までの

お墓の管理をお寺にお願いし、お墓参りすることです。

〈問19〉 先祖は仏教徒で後継者がカトリックの場合、お寺のお墓と一緒に埋葬することができるのでしょうか。

〈答〉 お寺が許してくださるならば、カトリック側では差し支えありません。しかし、〈問18〉に書いた通り、特に家族全員がカトリックになったならば、カトリック墓地か、公共の墓地に新しくお墓をつくり改葬されるのが望ましいことです。

〈問20〉 お墓の方位が悪いので厄払いをしていただくということは、カトリックでもするのでしょうか。

〈答〉 キリスト教的に言えば、一般的に方位が悪いということはありません。したがって、厄払いも必要ではありません。ただ、信者でない家族が、お墓の方位を気にして方位を見てもらったり、厄払いをしてもらうことに反対する必要はありません。このことは、家の方位についても同じことです。このような時でも、可能なら司祭を呼んで祝別してもらい、納得してもらうことはできないでしょうか。

〈問21〉 お墓には、亡くなった人の魂が何らかの形で入っていますか。

〈答〉 お墓には、亡くなった人の魂が入っているわけではありませんが、故人の遺体、遺骨、遺髪が入っているので大切にしなければなりません。そうすることによって、わたしたちも故人も神の慈しみによるキリストの救いの共同体に属しているという連帯感を深めることができます。

その他

〈問22〉 人が死ぬと長い試練の道をたどってから、やがて極楽に着き、ついに、先祖の位にあげられると多くの人たちは考えています。それで死んだ人の親族が供え物をしなければ、死者の霊が苦しみを受け、生者を害するのだと思われています。

カトリックでも、そのような考え方をしていますか。

〈答〉 各宗教によって、死後どのようなようになるかは、教えることが違います。カトリックでは、質問とは違った意味ですが、死後の道を認めます。

カトリック教会は、初期の時代から死者のために祈り続けてきました。その祈りは、死んだ人に永遠の安息（やすらぎ）を与えるようにとの願いがこめられていました。教会の教えによれば、「聖人」を除いては、ある清めの過程を通らなければ完全に神との一致に到達することはできません。

たとえ清めの過程（煉獄^{れんごく}）にいる人でも、生きている人よりも密接に神の愛にあずかっていますので、わたしたちに害を与えることはありません。死んだ人たちは、生きている家族の幸福だけを望んでいるのです。ですから、亡くなった人の霊が生きている人に害を加えるということはありません。

〈問23〉 先祖を大切にしないと罰が当たりますか。

〈答〉 前問とも関係していますが、子孫に罰を与えるような先祖はありません。その意味では、先祖からの罰はありません。

ただ、自分の心の中に罪責感が起こる時、時として先祖を大切にしなかったのではないかと思います。そのために罰が当たると考える人がいます。

キリスト信者の場合、先祖を大切にしないで悪かったと思つた時は、神にゆるしを願ひ、あらためて先祖を大切にするように心がけましょう。

〈問24〉 先祖の中には、地獄にいる人もいるのでしょうか。

〈答〉 誰が地獄にいるかということは、わたしたち人間にはわかりません。この世にいる時、もしも神と隣人とを全く愛さない人がいるとすれば、そのような人は自分から愛と幸福の源である神から永遠に離れていった状態にとどまります。これが地獄の状態です。しかし、人間は他の人の真の心を見ることができませんから、誰についても、その人が地獄に落ちたと断言することはできません。

神は、すべての人を愛し、救われることを望まれています。死後のことは、このような神の愛の摂理にお任せしましょう。

〈問25〉 カトリックにも無縁仏のようなものがありますか。

〈答〉 霊が迷い出て来るといふような意味の無縁仏はありません。後継者がなく、祈る人がいないという意味での「無縁仏」であれば、カトリック信者は、そのような人たちのため

に祈るべきですし、教会は、今でも毎日祈っています。

特に、十一月二日の「死者の日」には、ただ単に親しい人たちのためばかりでなく、忘れられたすべての人たちのためにも祈っています。

〔参考文献〕

- 一、第二バチカン公会議公文書 『現代世界憲章』 中央出版社（現、サンパウロ）
- 二、第二バチカン公会議公文書 『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』 中央出版社（現、サンパウロ）

あとがき

今まで京都教区、丸山吉高師の『カトリックの葬儀と祖先崇拜』という小冊子があり、それに姫路教会の信徒からの質問を加えてM・クリスチャン師が『カトリックの祖先崇敬』という小冊子を作りました。これも重版の必要に迫られておりましたが、時を同じくして当委員会も信徒の要望に答えたいと、このM・クリスチャン師の小冊子を土台として、実践的指引きを作成しました。

この小冊子を刊行するにあたって、ご指導、ご協力いただいた方々、藤井正雄、安齋伸、武田友寿、T・インモース、M・クリスチャン、関戸順一、P・ネメシエギ、J・ヴァン・ブラフト、J・スインゲドー、三末篤実、百瀬文晃、門脇佳吉、R・レンソン、山本襄治、また、その他にもご意見をお寄せいただいた方々に厚くお礼申し上げます。

なお、この小冊子で扱いました問題は広範にわたるものですので、その不完全さは心得て

おります。読者のみなさまから建設的ご意見がいただければ幸いです。
この小冊子が読者のみなさまに少しでもお役に立つことを祈念しつつ。

一九八四年十二月

日本カトリック司教協議会

諸宗教委員会